

「物語」としての『歐洲紀行』

—〈日記〉、〈紀行文〉そして小説へ—

文化創造専攻国文学領域

一八〇〇三CJM田 本 悠 馬

## 修士論文要旨

従来『歐洲紀行』は、横光の渡欧体験を記録したものであり、「旅愁」分析のためのサブテキストとして扱われてきた。近年の研究では、『歐洲紀行』の文学テキストとしての独自性を見出そうとする論考が主流となっている。ただし、いずれの論考も、単行本としての『歐洲紀行』には注目しておらず、『歐洲紀行』の文学史的意義を十分に提示しているとはいえない。本論は、一九三七年に創元社より刊行された単行本『歐洲紀行』の新たな文学史的意義を探るものである。

本論で注目するのは、『歐洲紀行』におけるジャンルの混淆である。『歐洲紀行』を手にとって開いてみると、ヨーロッパの街並みや自然風景を映した写真からはじまり、巻末には「厨房日記」と題する小説が収められている。この一冊の単行本が意味するのは、『歐洲紀行』と銘打って発表されたものが、渡航中および帰国後に各紙で発表された海外通信だけを指すわけではないということだ。

そこで本論では、横光が当時抱いていた問題意識が『歐洲紀行』に反映されていることを指摘しつつ、近代における〈日記〉、〈紀行文〉の特性、横光が書いた旅行記の特徴の分析、高浜虚子『渡仏日記』と『歐洲紀行』の比較を通して『歐洲紀行』が記録的な内容と虚構性を含む内容とが同じテキスト上に書かれていることを指摘した。この点を出発点として、『歐洲紀行』におけるジャンルの混淆の問題を考察した。

本論で考察したのは、『歐洲紀行』における俳句表現の導入と、『歐洲紀行』と「厨房日記」の連続性である。『歐洲紀行』では、俳句表現を導入することで、作品に時空間的な奥ゆきを持たせ、心理の変化を表現していた。加えて、俳句表現は、帰国後の横光作品にも応用されていることを指摘した。そして、『歐洲紀行』と「厨房日記」の連続性を分析することで、『歐洲紀行』を〈紀行文〉の枠組を超えたひとつの「物語」として捉えようとするのが本論の目論見である。